

## 果荃英先生のご退職に思う

竹 田 正 純

(外国語部長)

果荃英先生は、去る3月31日をもって、定年を迎えること一年を前にし退職された。一日でも長く教授会のメンバーとしてとどまっていただけのように私たちは願ったが、先生のご辞意は堅く、再三お引き止めしたのに、ついに翻意されるには至らなかった。残念でならない。

私たちは、先生が通勤にご不自由をされていることは百も承知の上だったが、学生をふくめ私たち後進のために、少しでも長く、ご指導をお願いしたかった。これが偽らざる気持だった。しかし、こうした願いも、私たちの単なる身勝手な期待にしかすぎなかったことを、先生の高潔なお人柄によって教えられたのである。健康上の理由をふくめ、もし教育に責任がもてないと感じれば、去る。こう、お考えになっていたのではないかと思われるのである。いたずらに在職年数のみを増やし続ける私は、身の引き締まる思いで先生のご辞意を知ったのだった。せめて定年をお迎えになるまでは、教授会のメンバーとしてとどまっていただけだったのである。しかし、ご意志は固く、こうして私たちは、長年、中国語教育に情熱を傾けてこられた先生とお別れしなければならなくなった。返す返すも残念でならない。

私は今、果先生が駒沢大学においでになった頃のことを思い返している。先生が私たちのメンバーにおなりになったとき、駒沢大学は激動の余震未だ鎮まざるの時期にあった。「外国語部教授会」はまだなく、私たちは文学部にいた。外国語の教育環境たるや、現在とは比較にならないほど劣悪なものだった。急激な私大の膨張が大学紛争の一ファクターとするなら、それが沈静化に向かってもなお、各私大は膨張のみに気を取られ、教育・研究の質的向上には何ら有効な手を打っていなかった。質的向上というとき、えてして後回しにされるの

は外国語教育である。そのうえ中国語に関するかぎり、当時の時代的な背景も無視することができない。中国との長い不幸な歴史のために、当時は一般に、中国語への、とりわけ現代中国語への認識には実にお粗末なものがあつた。このことは一般のみならず、大方の大学においても例外ではなかつた。誤解を恐れずに言うなら、漢文の教師をあてがっておけば足る、と考える者がいても決して不思議でない時代だつたからである。

果先生は、そういう時代に、駒沢大学においでになつたのである。先生のご苦勞はいかばかりだつたらう。なるほど、先生の日本滞在は戦前の奈良女高師へのご留学から始まり、したがって類稀な日本通というより、むしろ私たちと何ら変わるところはなかつた。しかし、いかに日本と時代とをわかつておいでだとしても、当時の先生の胸中には、暗澹たる思いがあつたと私は想像する。当時、私たちはどれくらい先生の胸の内を考えたことがあつたらう。私は人の言う「国際化」という言葉を好まない。時代がどうであれ、上のような中国語への無理解ひとつを考えても、軽々には口に出せない言葉であるからである。

しかし果先生は、あの劣悪な教育環境の時代より今日まで、一貫して、中国語教育に情熱をもち続けてこられた。先生はよく講師室を利用されていたが、周りには何人かの学生がいつも座っていた。授業の合間にも学生の指導に当たられていたのであるが、そんな光景を私たちは皆よく記憶しているはずである。やがてその集まりが同好会「中国語研究会」に発展していったものと想像するが、その指導者としても、長年にわたり情熱を傾けてこられた。中国語に長じた卒業生が、そこから何人巣立っていったことか。数え切れないほどの卒業生が、習い覚えた中国語を武器に、現在、各方面で活躍している。また、私たちの職場にも、先生の教えを乞うた人が幾人も残っているし、同僚として、この度新たに迎えることになつた中国語の若い先生も、果先生の教え子の一人である。

私は門外漢ながら、中国語教育について、先生の情熱的なお話を何度か聞かせていただいているからわかるのであるが、先生は、立派な北京語を話されるネイティブ・スピーカーとしてばかりでなく、ひとりの教育者として、中国語

の教育とはどうあるべきか、を常にお考えになっていた。中国語教育についての理想的な姿というものが、いつも先生の胸裡にあり続けていたように思われる。それが優れた卒業生をお育てになった原動力だったと私は信じている。

最後になったが、果先生には、長年にわたるお疲れをゆっくり癒していただいて、今後ますますご活躍くださるようお願いしたい。

## 果荃英先生のこと

吾 妻 雄次郎

(ドイツ語)

人が職場から去って行くことは、どのような理由であれ寂しいことである。もちろんこのような感想をもつようになるのは、誰もがどいうのではなく、人生の峠にさしかかった者のみが浸る特異な感傷なのかも知れない。T先生のように定年までの時間を全うされ、なお余力を駆って、新たな人生を、と少なくともはた目に見える場合には、己の前に立ちほだかる不安までもが拭われるようで、なんとなく気軽な気分になれるものである。もっとも、このような場合には、頭の髪が薄くなるとか、物忘れがひどくなるとか、年相応の老化はやむを得ないとして、果たしてこの自分は、あまり人様に迷惑をかけずに、無事定年までもつかどうかと言う不安に見舞われることも確かなのである。

果先生はいろいろと迷われたに違いない。定年までこぎつけるか、途中退職を選ぶか、少し決心が揺らいでおられるというはなしは、なんとなく私などの耳にも伝わって来てはいた。しかし2月20日の教授会に突然姿をお見せになって、どこからか空気の漏れるような、決して流暢とは言えない日本語で別れの挨拶をされたとき、とうとう幾つかの選択肢の中から、退職を決意されるに至ったかと、何とも名状し難い感慨に襲われたものである。しかし果先生は、まだ完全に快癒していない不自由な足取りではあったが、ここ10数年お目にかかったことのない明るい晴れ晴れとした表情で、終始にこやかにしておられたの

が印象的であった。それから数10分、いや1時間もたたなかつたころ、私が中座した時だったか、教授会が終わってからであったか定かではなくなつてしまつたが、果先生が息子さんと思しき青年に腕を支えられて、カフェテリアの前あたりを歩いておられる姿を、遠くからお見かけし、やはり先生にはご家族に囲まれて静かに歩む未来への懸け橋があるのだと、あの明るい表情のいわれが分かるように思えたのである。

思えば10数年前の果先生のお顔からは、笑いが消え失せていた。それが何に起因するものであったのか、私にはそれを述べる資格もないし、またそのころの事情に通じてもない。詮索しようとも思わない。しかし当時、役職にあつた立場上、いろいろと相談を受け、ご夫君の羅漾明先生をも交えての幾度かの話を思い起こしてみると、人事をも含め、いろいろなことが自分を素通りして運ばれていると言うのであつたように思う。真偽の程は別として、その後の教室の努力もあつて、人と人との誤解や蟠りは取り除かれていったように思うのであるが、当時は外国語部も産声を上げたばかりで、試行錯誤の時代にあつたことも確かである。もちろんすべてをこれに解消するつもりはないが、何事も制度化され、定式化される途上の事であり、また文化のルーツはかなり共通のものに根差しているように思われながら、百千年の時間の隔たりは、お互いの言葉の壁、風俗習慣の並々ならぬ違いを作り出して、ふとしたボタンの掛け違いが疑念と不信を生み、時には憎悪にまで発展しかねないということを教えられた気がするのである。恐らくは異文化の中で経験されたさまざまな苦勞が、当時の先生のおかれていた状況を必要以上に敏感に悪く捉える結果を生んだのではなかつたかと勝手に想像するのである。

近ごろ私の記憶もだいぶ怪しげになつて、あの脳の襞の隙間が広がり過ぎる、いわゆるアルツハイマー的傾向に見舞われているのか、果先生が赴任された頃のことを、なかなか思い出せないでいる。本来なら果先生より10数年ほど前からこの大学に厄介になつてゐる私が、あの当時を想起し、記憶を辿らなければならぬのに、まことに情けない話である。いずれにせよ20年に亘る長いあいだ、やはり同じ本学のために、非常勤として尽くされたご夫君ともども、学生

達の中国語指導に尽くされた功績は、はかり知れないほど貴重、且つ大なるものであったと、今更ながら感謝申し上げる次第である。特に果先生が健康の不調その他の理由で都合のつかない折りに、羅先生が課外サークル指導に、幾度となく、夜晩くまで奥様の代役を勤め、学生たちの相手をされているお姿に接し、そのチームワークの良さもさることながら、学生指導の責任の重さについてもいろいろと考えさせられもしたことである。

20年の長い間、しかも定年までの1年を残して退職を決断された先生が、世紀の曲がり角にさしかかった1991年を振り返って、これが最も適切な選択であったと言えるように、今後の生活に新たな意欲を燃やされることを切に願う次第である。

## これからよろしく、果老師

釜屋 修  
(中国語)

果先生とのおつきあいは、実に短い。私が駒沢大学にお世話になってからだから、たったの4年である。いつでもお話をうかがうことができる、という思いでいたから、お会いしてからずうっと胸に抱いていたさまざまな質問を、しっかり先生の前にさしだす前に、先生の方から「実はやめようかと迷っているんです」と相談をもちかけられてしまった。出生、少女時代のこと、大学のこと、来日のいきさつ、奈良女のこと、羅漾明先生とのロマンス、駒沢赴任以前のこと……質問事項として並べだしてみれば、ごく平凡なことがらではある。

ニム・ウェールズ『アリランの歌』に描かれた朝鮮人革命家キム・サンの実像について、李恢成氏や『民濤』誌が綿密な調査をしてくれた。“ある朝鮮人革命家”などという豪華なサブ・タイトルはともかくとして、数奇な運命に見舞われたとしても、人間らしい苦悩はきわめて平凡な人間性の中に誠実に息づいている、というのが私の印象である。

果先生が数奇の運命をたどってこられたと知っているわけでは、もちろん、ない。1920年代から30年代にかけて、来日・滞日した多くの中国文学者のさまざまな生きざまは私の心をゆさぶる。当時の日中間の抑圧・被抑圧という関係を反映して、彼・彼女たちの言行は私たち日本人にとってきわめて示唆的である。かと言って、果先生の姿をそれら文学者の生きざまに重ねているわけでもない。しかし、定年まであと1年を残して退職を決意される過程で、“休職”をお勧めした時「あなた方日本人はどうお考えになるかわかりませんが、私は外国人ですし、また駒沢大学にはお世話になり、そのおかげで子どもたちに教育を受けさせることができたわけですから、駒沢大学から、休んで給料をもらうことは私にはできません」といった意味のことを、中国語で淡々と語られたことがあった。一見美談風のこのことばを、私は美談としてではなく、在日中国人の、在日外国人のある思いを凝縮したことばと解釈する。そう解釈した私には、ずうっとおたずねすることなしに放置してきた果荃英という1人の女性の生きざまについての解明欲求があらたにわきあがっている。

駒沢を去られた以上、先生とお会いする機会は少なくなった。しかし、私はいま逆に、先生とゆっくり話したい気持ちをしんげんに感じている。果先生、これからもよろしく。

(91年5月4日五四記念日に)

## 果荃英先生の笑顔

岡崎 寿一郎

(英語)

果荃英先生が定年に一年を残されて退任されました。理由は御病気とのことです。しかし、本館の講師控室で御会いしていた先生は、足下をかばわれながらも、きちんとした御様子で教場に向われていました。ですから、私は、その理由を御聞きした時、なにか釈然といたしませんでした。きっと、御自身にきびしくあられた先生は、私たちには十分と思われたことにも納得されなかったのかと思われます。思えば、私は一六年間を先生と御一緒に過ごすことができ

ました。そして、その間、私は、いつも真剣に中国語教育に取り組まれてきた先生を畏敬の念をもって見つめてまいりました。ただ、私は、いつか果先生に言いたかったことがあります。私は先生の笑顔が好きでした。果先生、長い間ほんとうに御苦勞様でした。どうぞこれからも御元気でいらっしてください。

## 果 荃 英 先 生 へ

佐 藤 玖 美 子

(スペイン語)

果先生がお体を悪くされてこの数年、ゆっくりお話しをする機会も無いまま、この度退職されるということをおうかがい、本当に残念でなりません。もうあと一年で停年を迎えられるのに、それを待たずに、退職されるという先生の責任感の強いご意志に感服いたします。

いつもおだやかな微笑をたたえられ、鷹揚で物静かな先生でしたが、そのかげにいかにも中国女性らしい強さ、逞しさを秘められ、私の尊敬する女性の一人でした。どうぞこれからまだまだ長い人生を、お体をいたわりながら、先生のご専門の現代中国語の語法の研究に専念され、また立派な奥様として有意義にお過ごし下さいますように。

お幸せを心から祈ります。

## 果 先 生 の 想 い 出

杉 山 秀 子

(ロシア語)

果先生は駒大の中国語科の中では本当に大きな存在でした。おそらく果先生の心は常に、在日の中国人として中国語科を将来にわたって何とかしなければ

いけないというやむにやまれぬ使命感に貫かれていたのではなからうかと思われ  
れます。果先生は長期日本滞在者でありながら、決して日本人と同化すること  
もなく、妥協することもなく、むしろ、日本人と一定の距離をあえて保ち、日  
本人を冷静に厳しくみておられる面も御ありのようでした。しかし今から思え  
ばけっきょくこのことが真の日中友好のあかしであったことが理解されます。

果先生が在職中最も心を砕かれたのは正しい中国語教育のあり方と、中国語  
科の民主的発展という二つのことに尽きると思います。この二つのうちのどち  
らも現在、明らかに達成されつつあると確信しております。

果先生との長いおつきあいの中で感心させられたことは、一つには大局的な  
立場から将来を悠々と見通せる能力をもっていられたことと、まちがったこと  
は徹底的に追求し、そのことのためには周囲のことには脇眼もふらず、とこと  
んやってしまうという何とも大陸的な一面でした。ある年、ある時の教授会で  
の延々なる果先生の発言は、私にはかの五・四運動に参加した学生達の徹底的  
糾弾のありさまを眼に彷彿させるのには十分でありました。そして、同時に、  
日本の女性には決してみられないような、独特な中国女性の魂の深淵を垣間み  
たようで一種、新鮮な感動さえ味わいました。

色々なことがらを通し、果先生はすばらしい教訓を私たちに残して下さいま  
した。

どうか長年の御勤務の御疲れをとり払い、一層のこと、英気を養って下さる  
ことを切に望んでおります。

## 果先生のこと

小 川 隆  
(中国語)

新米とはいえ今は中国語教師として勤める私が、生まれてはじめてこの中国  
語なる言葉と出逢ったのは、大学の第二外国語としてこれを選んだ時のことで



あった。今から十余年の昔、私がこの大学に入学した、その年の春のことである。

その時、なお汚れを知らぬ(?)我々の耳を、北京語独特のあの美しい音色と旋律で驚ろかせたのが、わが果荃英老師その人であった。それ以来、或いは教室で、或いは「中国語研究会」で、また或いは研究室で1対1で、私はずっと先生のご指導を受けてきた。もし先生の仕込みがなかったならば、後年、先生の育った北京の街に自からが留学し、さらに先生が長年勤務なさった中国語教室に、自からが奉職しようことなど、到底思いもよらぬことであつたらう。

この間、先生のご指導は、いつも終始にこやかで、ほのぼのとした雰囲気につつまれていた。眼を細めてうなづきながら、発音を直し、作文を添削して下さったお姿は、いつも温たかな思い出として私の胸にある。今になって思えば、先生がご夫君の羅漾明先生とともに歩いてこられたこの数十年間は、日本と中国の双方で、さまざまの複雑な歴史が展開する歳月であった。そして、日本で暮らす中国人がその間で逢着してきた種々の苦悩や困難は、やはり両先生にとっても決して無縁のことではなかったはずだ。しかし、両先生は、少なくとも我々学生には、そうしたものをわずかも垣間見させなかった。両先生が我々に示して下さったのは、常に中国の伝統的な読書人のもつ、ある種上質な感じの温和さであり、理性に裏づけられた折り目正しい優しさであった。私も含めて少なからぬ受業生達が、中国の現状に時に圧倒され、時に絶望しながらも、なお中国関係の仕事が続けられているのは、おそらく我々の中国体験の原点で両先生の温容が見守っていて下さるからだと思ふ。

その果先生が、今年の三月で退職なさった。定年まであと一年をのこすのみである。たしかにこれまで、杖をつきながら半歩ずつ、遅々とした歩みで教場に向うお姿は痛ましくもあつた。だが、のこりの一年くらいは病欠なり何なりの措置によって、自宅で休養しながら定年を迎えることもできたはずである。それを敢えて退職の決断をなさったのは、おそらく授業をせず給与だけを得ることを潔しとしない、いわば晩節を汚したくないという意識が強くあつたことに相違ない。ほのぼのとした温かな笑顔しか知らなかつた我々は、その内

側で先生がずっと守ってこられたこの節操の頑くなまでの険しさに、鋭く胸を突かれたのだった。

今、私の目の前には、十数年前の我々と同じように、ま新しい教科書を手にもって中国語の発音と悪戦苦闘している学生達の姿がある。その頃に比べると教材の種類も豊富になり、中国に関する情報も大量にもたらされるようになっている。だが、と私は思う。先生が身をもって我々に示して下さった、あの上質な温かさと身の処し方の厳しさを、私はどのようにして次の人々に伝えてゆくことができるのだろうか、と。

本来ならば果先生が定年を迎えられるはずであった明年は、恰かも日中国交回復の二十周年のときに当たる。

一九九一年五月二一日

## 果先生の思い出

鈴木(砂岡)和子

### \* 「お茶をどうぞ」

切りそろえた銀髪に濃紺のスラックスがよく似合う先生が、綺麗な北京語で誘われた。果先生にお目にかかったのは1984年暮、駒沢大学中国語研究室であった。90年91年は毎週水曜日に講師室にお喋りの花を咲かせた。親しくなると発音や言い回しも矯正していただいた。「ちょっとおかしいよ。lěn じゃなくて lěng。それに“覺得不冷”より“不覺得冷”のほうがいいよ」水曜プライベートトークを楽しみにしていた矢先、果先生の御退官を知った。急のことでまだ思い出に昇華せず、とりとめ無いよもやま話の記憶も定かではないから、果先生が読まれたら「ちょっと違っているよ」と電話がかかってくるやも知れない。わたしは今、先生のそんなストレートさが恋しい。

### \* 北京への里帰り

果という姓はめずらしい。90年夏、果先生は数十年ぶりに北京へ里帰りを果たされた。「衣錦還郷」ですね」と申し上げたら「北京の親類も、恵まれた仕事と安定した暮らしを送っている」と淡々と答えられたのが印象的だった。従弟で社会科学院の少数民族の研究者が、最近家系を調べ直したところ、自身満州族であることが判り、改族したと言うお話も興味深かった。90年の中国第4次人口調査では満州族の2.28倍を始め、82年に比べ数倍の増加率を示す少数民族が5、6種族ある。これらは自然増加ではなく、果先生の縁者のようにルーツ解明によるものであろう。大陸の大らかさに感じ入ったものだ。

#### \* 落地生根

先生は1943年に日本留学のため故国を離れた。再会の感激は想像に難くない。「病床にある叔母は声をあげて泣いているのだけど、年をとると涙が出ないのね」と驚いたようにおっしゃった。先生の実事を冷静に見つめる目と、虚飾を排した人生観はいつ養われたのであろうか？ 私は密かに興味をもっていた。五四運動後の少女時代？ それとも留学期戦争を挟んだ長い日本での生活？ 先生は聞けばなんでも話してくださった。生まれ育った大家族のこと、母堂の世代の纏足のこと、開明的な御父君、奈良女子大時代、空襲……辛い時期の事は伺ったことがない。

90年11月は平成天皇の即位式、大じょう祭と、日本の伝統儀式が続いた。どこまで国家行事と扱うかで、賛否両論喧しい中、果先生の関心事は美智子妃殿下だったようで、戦後の御自分の歴史を重ねていらしたのだと思う。

#### \* 開花結果

先生は学生を可愛がられた。授業中、こんなことを言った、可笑しなことをしたと、御自身も子供のように笑いこける顔には慈愛の表情が満ちていた。単位取得が危うい再履修の学生を授業後に呼んで、聞き取りの追試をなさっている現場に居合わせたことがある。「これもだめ？ 一年のよ。困ったね。」なかなか厳しく迫るが目が笑っている。

\* 去るかたへはなむけの言葉は難しい。でも先生なら中国式に「果老師，享渡晩年！」を快く受け取ってくださるような気がする。果先生はスポーツの観戦

がお好きという。「息子たちは“お母さん男みたい”というけど、野球みてる  
と気持ちがいいね」。果先生の竹を割ったような気性を知れば、なるほどと納  
得しよう。愛した学校や仕事、学生にはまだまだ心残りがおありと察する。一  
方先生が暖かい御家族に囲まれ、テレビのホームランやバレーの強烈スパイク  
の画面に“好！”と声援を送る姿を想像するのも、豊かな気分だ。来年も北京  
に里帰りしたいとっておられた先生、お土産話をたのしみにしております。

(1991年 3月15日記)

## 果先生と私 ——中国語研究会のことなど——

橋野律子

(本学管財部勤務)

私が果先生に初めてお目にかかったのは、もう十年以上も前の短大生の時で  
す。当時まだ中国旅行は珍しい時代で、夏に訪中を予定していた私は、同級生  
から中国語を教えて下さる中国人の先生がこの駒沢にいらっしゃると聞いて、  
2年生から初めて先生の授業を履修致しました。外国人の先生に、その国の言  
葉を直接教えて頂くことに、私は深く感動したものです。訪中は決めていたも  
のの全く中国語を知らず、前年から勉強している他学生の足手まといになりそ  
うな私を、果先生は優しく気遣い励まして下さいました。

卒業後、大学に就職してからも、土曜の午後の先生の授業を聴講させて頂き、  
また「中国語研究会」という先生の指導されるサークルの存在を知って無理矢  
理入会させて頂き、そこでも先生の御指導を受けるチャンスに恵まれました。  
この研究会でも、退勤後の途中参加ということで皆の足を引っ張り、さ程進歩  
しない私でしたが、先生はいつもニコニコ笑いながらウーロン茶と演習机一杯  
のお菓子を勧めて下さいました。当時から足が丈夫ではなかった先生は、駅ま  
での道のりを歩くことが大変なので、勧銀の前から渋谷までバスで帰宅してお

られました。その後何回も入院・手術までもなさりながら、殆ど大学の休暇中に治療をされ、授業を休講することもなく熱心に学生の為に尽くされました。特に我々研究会の学生に対するお気持は、まるで皆が御自分の子供であるかの様でした。私達の向学心を理解され、お体が丈夫ではないのにお忙しい時間を割いて毎週夜遅く迄発音を教えて下さいました。何の代償も無しに私達にあれ程尽くして下さいました先生は、御主人の羅先生ともども、私達にとって親以上の存在であった様な気がします。特に私などは御多忙中媒酌人までお引き受け頂く等、私的にも何かとお世話になって居ります。

私が結婚する時、果先生は「女性は仕事を続けた方が良い。辞めないで定年迄働きなさい」と云っておられたのに、御自身は、通勤にも往復タクシーを使わねばならぬ程お体が思う様にならなくなり、あと一年で定年というこの時に大学を去ってしまわれることになりました。御自分の責任を果たせない以上勤務し続けるわけにはいかない、という強い正義感から決断されたのだと思いますが、先生のいらっしゃらない大学を考えると寂しい限りです。でも、当時熱心に学んでいた仲間も今は社会人となり中国語関係の職業に就いている者も少なくありません。皆先生から頂いた大きな力を手にそれぞれの道で本当に活躍しています。これこそ、先生が残して下さいました大きな財産です。

果先生、どうぞ今まで私たちの為に無理して頂いた分、これから充分に休養なさって下さい。私たちも先生から御指導頂いた事を誇りとして、先生の温かいお心を後輩達に伝えて行きたいと思えます。長い間、本当に有難うございました。

# 中国語・小話

小 玉 齊 夫

1

在巴黎的時候，我学了中文一点儿…

私の些細な体験に基づいて、ということではかないのだが、外国で「生活」を続けていると、「祖国・文化」に自身を拘束させたくなる、そんな事態に、程度の差こそあれ、何回かは遭遇するようである。内に閉じこもることで外に広がる「異質」の世界から自分を守り、同時に、内部の「故郷」に舞い戻って心の安らぎを得ようとする、精神衛生からすればきわめて当然な心理の機制、と言うべきであろう。

とはいえ「日本主義者」たらんとする自己を把捉する意識は、必ずしも幸福な瞬間を経験するだけではなかった、ように私は記憶する。大袈裟に言うならば、卑俗で怪しげな作為を自身に認めることへの不快感が在った。あるいは、「暫定的に」とか「仮に」という遁辞によって方向転換を必然化したい自分に対する不満が残った。この種の撞着・感覚は、自己自身に向かって成される告白には常に伴っているものかもしれないが、しかしそれにしても「日本再発見」というような理由でそれを積極的に解消し得る、言うならば生産的な人々の群れに、幸か不幸か、私は含まれていなかった、ようなのである。

\*

パリ第七大学サンシェ校舎の三階であつたか四階であつたか、ともかくも「中文科」一年のそのクラスには、何故か、私を含めて三人の「日本人」(“riben

ren”) がいた。第三者（ここではフランス人を指すわけだが…）からすれば、二人の黄色い男と一人の黄色い女が母国語とも言えそうな中国語をわざわざパリで学ばんとする、その意図は奈辺に在りや、と疑問に思ったかもしれない。私にしても、教室で他の二人を認めた時には、かなり強度の「不審感」を抱いたことは確かである。その一人、農学部を出たK氏は日本に帰ってからは何故か音楽の先生になっているが、もう一人は、原子力関係の研究留学生である配偶者と共にやって来た広島県出身のA夫人。後に話題となることはあったのだが、韜晦しがちな雑談の席では本音が語られることも期待し難く、結局今となつては、中国語に向かおうとした我々三人のそれぞれの意図は、お互いに不明と言うほかはない。もちろん他の受講生とて、皆が皆、明確な目的を持っていたとも思われないが、たとえばアルジェリア人のスリムが大学食堂での仕事の合い間に中国語を習うのは、あるいはヴェトナム系のマリイが漢字に対して「郷愁」を感じるといふのは、そしてまた外務省に勤める配偶者がそのうち任官させられそうだと、として学び始めた16区に住むフランソワ・ポンセ夫人の場合等々は、それぞれに確固とした動機を示して、私などは、いささか飛躍するがアンドレ・マルロオと「東洋語学校」との極めて実用的な関わりを思い浮かべたほどである。戦前の日本に於ける「兵隊支那語」と「行商支那語」（安藤彦太郎『中国語と近代日本』）の在り方など、その種の問題は今日でも依然として残存しているのかもしれないが、それでも、実用性を求めての言語習得という当然の在り様は、いかなる教育機関においてであれ、やはり、もっと「当然」と考えられてしかるべき、なのかもしれない…

ところで思い出してみれば、サンシェではもう一人、N氏に出会っている。「恩師」というような語彙は私には無きに等しいのだが、しかしともかくもN氏に、私は大学二年のフランス語「講読」を教わっているのだ。フランシス・ジャムの詩および散文からなる教科書—現在でも利用可能だが、私は未だ使う気になれないでいる—を讀んでいただけで、実用性に傾斜していたなどとはとても言えない。だが、N氏の訳解・説明を聞いていると、田園風景のなかで綴られたジャムの宗教的慈愛に満ちた穏やかな思想・表現も、実は目の前のN氏

## 中国語・小話

自身によって創り出されたものである、かのような、そんな印象を授業の度に私は受けてしまうのであった。ジャムの詩文を御存知の方には、そう言っただけで、N氏の人物像のおおよその輪郭がお分かりいただけるかと思う。当時の私にとってフランス語授業の有効性とはそういうものであった—現在でも、やはりある意味では、そう思っている—。だが、それはともかくとして、そのN氏、東京でフランス語・フランス文学を教えているはずの、既に六年ほども眼にする機会のなかったN氏が、なんと、サンシェの中国語のクラスの前の薄暗い廊下を、何ごとか、中国語らしき音を口にしながら、何故か、ゆっくりと、何回も、行ったり来たり、していたのであった…（後に聞いたところでは、次の学年度からサンシェで日本語を教えることになっており、それまでの時間を利用して、かつて学んだ中国語に「いっそう磨きをかけようとしていた」のだそうである。）

さて、そのサンシェで私が受けた中国語授業の内容ということになるが、当時としては最新鋭とも言い得るテープレコーダーと連動したスライドを利用したの実用的な会話中心の授業が、週2時間。これを担当していたのは、留学先の上海から戻ったばかりで、濃紺の「人民服」を愛用していた20代後半のフランス人D。彼はどの生徒に対しても初めから“tutoyer”で話し—従って、我々の方も彼に対して“tu”で答えるのだが—、長髪の、当時の感覚で言うならマオイスト（毛沢東派）とも目される小柄な男で、年度の後半の教材が、「毛主席」や、かの有名な「白求恩」医師も登場する抗日戦争時の英雄的闘争譚。後になって『中国を変えた西洋人顧問』（ジョナサン・スペンス著、三石善吉訳）の紹介で、この「情にもろい、短気で天才肌の」カナダ人医師の波瀾に富んだ生涯を知ったが、もちろん、私たちが読んだのは初級中国語に書き換えたものである。現在でもこの種の教材を用いているのかどうか、事情を詳らかにしないが、当時の私にとっては初耳のことなども多く、それなりに面白い読本ではあった—私の「国粹思想」が刺激されるような場面は、これはなかった、と断言しておいてよい—。だがそれにしても、心底から個人主義者である（かの如き）クラスの他の人たちにとって、権威に対する滅私奉公的・集団倫理を



要求する毛沢東主義一などと概括してよいものやら一を、スノビズムあるいはエキゾティズムではなしに理解あるいは受容し得たかどうか、傍から見ているかぎりでは、いささか疑問なしとはしない。だから、というわけでもないのだが、古色蒼然とした、もしくは超時代的とでも言うべき、あの「流線型」の優雅な黒いシトロエン車を運転するDが、授業の後などに例のヴェトナム嬢を乗せて辺りをドライブして喜んでいる様子を見ると、何故か、私の心も軽やかになったりする、ようなものではあった。

そのDの、授業の折り折りに成された留学中の思い出など、それはそれで興味深い話が多かったが、そのほかに関心をひかれた物のひとつに、パリで生活していた中国人「アナーキスト」の掲げた「半工半読」という標語があった。一年とか一カ月、あるいは一週間、一日など、ともかくもそのうちの「半分は働き、残りの半分は学習しよう」という生活方針のことで、単にそれだけなら、「晴耕雨読」と異曲同工ではないか、などと半畳を打たれそうであるが、当時の生活の在り様とも関連して私には少しく気にかかり、Dなどに尋ねてようやく中文科図書室で見つけ出したのが *The Origins of the Anarchist movement in China* という英語の小冊子。副題には『中国無政府主義運動的起源』とあり、著者は匿名の“Internationalist”，ロンドンの Coptic press, 1968 年発行となっていた。ここではその内容を紹介する余裕もないが、「半工半読」が提唱された経緯は如何かというと、1902年にパリにやって来た二人の中国人 Li Shih-Tseng と Chang Ching-Chiang が、当時の典型的な “anarcho-syndicalist organisation” であり、Emma Goldman によって “the university of anarchism” とも呼ばれた C. G. T. などの労働組合運動に強い関心を抱き、しかし当面は生計をたてるために貿易会社やレストランを設立して故国から同郷の青年たちを呼び寄せ、彼らを働かせながらフランスの思想・技術を習得させようとした、その時の標語ということである。『近代中国の思想世界』（野村浩一）などに基づく乏しい知識からの推測にすぎないが、西欧化への具体的な試みという点で言えば、陳独秀などが1910年以降にとる方向を先取りした動き、その一端が、既にパリで見出されていた、ということになる

のであろうか。そして、これはことのついでに書きつけるだけなのだが、この小冊子には巴金の筆名に関して《...Li Fei-Kan, who was the son of a wealthy family, who abandoned it for the anarchist movement. He adopted the name “Pa Chin”—or, in English, “Ba Kin” (Bakunin-Kropotkin...)》という紹介もされていた。はたして信頼のおける記述であるのか否か、遺憾ながら、私にとっては認定不能と言うほかはない。

ところで中国語の授業に戻ると、週にもう一時間、こちらは「無産者運動」とは「我れ関せずエン」的な、深窓の令嬢風の、台湾からだったと思うが、女子留学生を講師としての会話練習・作文の授業があった。発音の難しさは言うまでもないとして、しかし漢字の書き取りということになると、これはもう、我ら三人の“riben ren”の「独壇場」である。お題目としての国際親善などはどうでもよいが、フランス人およびその他の学生にとっては珍妙・奇態に見える漢字をすらすらと書きしるして教えることで、お互いの親密感が飛躍的に深まっていったことは間違いない。この種の「同志的結合」が、会話の授業を効果的に進めるためには不可欠である、ということは、これはもう全く議論の余地のないところである。

「効果」ついでに、私にとって視聴覚授業の効果はどうであったかというところ、「東郭先生很生气」とか「図書館裡都有」とか「我不知道什麼說好了」、「他說我有，可是我真没有」といった文例（何の脈絡もなく書き連ねることを大いに恥じております）を今でも思い起こすことが出来ることからすれば、たとえばテープレコーダーの「好！」という言葉に応じて先生がスイッチを押すと、親指を突き立てて、にんまり笑った子供が描かれたスライド画面が出てくる—もちろん、絵を見ながら会話内容を再現するという逆の過程の練習もあった—というような、音声と画像との強制的な「連合」の実践は、少なくともその時点での私に対しては、かなり良好な結果をもたらしていた、と認めざるを得まい。他に週に何時間か、いわゆるLLにあたる機器を用いての練習が指定されていて、私とその教場へ行くことが出来たのは昼休み—その時間帯でも開かれていた—だけであったが、まあ、遠慮なく言わせていただくなら、サンシェ付近の

中華料理店の店主風の、庶民的で親しみやすい中国人女性、「老」がまさしく「老」であるような「老師」がそこに待機しておられて、我々の発音を丁寧に矯正してくれるのであった。単位の取得のためには、この練習に数回出席しなくてはならない、というような仕組みになっていたはずである。

実を言えば、この時のLLの先生の姿からの連想もあって、ずっと後になってからのことだが、駒沢で、果 荃英先生の授業に出席させてもらい、敢えて言えばパリ風の我が初級中国語を少しでも本場のそれに近づけてみよう、と思ったことが一再ならずある。たしか、果先生からも一度、「ええ、いいですよ」とお許しをいただいたように記憶するが、私の授業時間とかさなったりして、結局、機会を逸してしまい、以後、生来の怠け心のゆえに私の中国語も放擲されて錆びつくがまま。現在ではもうその痕跡すら消滅寸前、であるのは、はなはだ残念至極、遺憾もここに極まれり、と申さざるを得ない…

## 2

これを要するに、1970年代初めのパリで自己の内へ戻るに際し、本来の文化的背景へ直線的に向かうよりも中国を「経由」してみたかった四人（三人？あるいは一人？）の“riben ren”がいた、という単純な事実を、まずは発端に据えてみよう、ということにすぎない。もっとも、既述のように我々の動機がみな同じであったとは思われず、N氏の関心などは、言うまでもないことだが、はるかに本格的に「文人的」方向に傾斜していたようである。だが、そうであるにもかかわらず、或る種の中国への「幻想」—この語は必ずしも否定的な意味合いで用いているわけではない—が、我々の共通の基盤として在ったことは、これはおそらく確かなことと思われる。冗長となることを恐れつつも以下に延々と引用するのは、これらの文章・規定が現時点でも訂正を必要としないのか否か、それを確かめたいからなのだが、たとえば「中国では都市と農村の対立、精神労働と肉体労働の差別の解消をめざし、都市の存在の根源を問うという人類の実験的課題に真剣にとりくんでいるのである。」（西川幸治）というような幻想、あるいは「(文化大革命の)過程は、一方では国家づくりであ

ると同時に、また他方では国家くずしだっただのではないだろうか。権限の集中、官僚機構の増大、その抑圧物への転化—こうしたおよそ国家機構にまつわる諸問題について、文化大革命はそれに対抗する一つの方向性を対置しようとしたかにみえる。」(野村浩一)といった幻想は、当時の私(たち)の関心の内部に、確実に存在していたのである。

実際、この種の文例は、当時の中国論を見直してみれば、いくらでも列挙できそうである。確かに、これらの評価をもたらした事態の歴史的な意義も未だ明確にされてはいないようであるから、上記の諸幻想に対する判断も、おそらくは多様になり得るのであろう。だが、少なくとも、戒厳令を必要とした1989年3月から6月4日に到る「事件」、その源に在った経済危機などを考慮に入れるなら、これらの諸幻想の「妥当性」は、いつともなく、いちじるしく、減少したかのように思わざるを得ない—のではないのか—。そしてさらに、上のすべての提言や証言を招来する、おそらくはその根拠となり得た、それこそ確固とした幻想も、やはりかつては存在していたのであり、しかもそれは、直接には時事性を免れているがゆえに、その妥当性に関する判断が停止されたまま、今日でもなお存続しつづけているかのようなようである。すなわち「アジア学」は「近代ヨーロッパを手本とする学問体系を内部から変革する学問として、その姿勢を絶えず問い返す自己変革の過程においてのみ」可能である(竹内好)、というような幻想…

\*

上掲の引用は、すべて、竹内好編の『アジア学の展開のために』からであるが、問題点をまとめて整理するならば、結局のところ、1)「都市文化・農村文化」、「精神労働・肉体労働」というような二項対立についての中国の「人類の実験」に対する回答 2)近代化としての国家権力機構・官僚制の「整備」と同時にその「解体」をも試みようとする、新たな二項対立についての中国の実験に対する回答 3)「近代ヨーロッパの学問」に「範型」を求めるのではない、新たな「東洋」学の可能性に対する回答、という、現時点に於いては—将来に於いても?—答えるのにきわめて困難な「三つの回答」が求められている、と

いうことになる。

ことここに到っては、西洋と対比した上での、日本および中国の「近代化」に関わる本格的な論稿を必須とするようであるが、中国語落第生の私には、その任に当たる資格さえなさそうなので、ここでの目標を、ひとまずは戦前期のいわゆる「近代の超克」論議その他の粗描に限定しておきたい。時代の違いや中国という対象の違いはあるにしても、上記「三つの回答」を要求する意識は、その底部で、意外に「近代の超克」論と関連しているように思われるからである。ということのさらに延長で言うなら、同じく上掲書で言及されているのだが、「中国イメージを全く日本人好みに作った」（橋川文三）というような批判は、決して戦前の「アジア主義者」に対してだけでなく、中国を「経由」しようとした私の如き単純な者も含めて、先に挙例した幻想や讃辞、そしてその内に認められる「ユウトピア的過去への回帰」思潮に対しても、やはり向けられ得るのではないか、という問題になるようである。

\*

上記「三つの回答」に関わる問題意識は、おそらく、言うならば「文化的視点」から立てられていると思われるが、ほぼ同様の問題を、しかし「民族的視点」により比重を置いたかたちで提起したのが、かつての「近代の超克」をめぐる論であった、というふうに、おおよその動向を与えることが出来るように思われる。

ここ50年近くは「民族性」の自覚も殆どなおざりにされて来たと言えるのだが、しかし、たとえば廣松渉氏は、『〈近代の超克〉論』新版（1989年10月）への序で、「昨今では却って、本書での討究主題と主張内容がアクチュアリティを有つようになっていいる」と認定されている一世相に疎いこともあって、私は1960年代末の「近代の超克」に関わる論議は承知していない。事実、「アラブの大義」を標榜し得た戦闘に関わる国際的な枠組みに巻きこまれた「昨今」に於いては、その「アクチュアリティ」を証する現象は、随所に見出されたように、私にも思われる。かつての帝国臣民が鬼畜と形容した「西洋国・連合」に敵対した「非・西洋」国の状況を、「日出る帝国」のそれと、部分的に

ではあれ、重ね合わせることが出来た一鎖国的状況・独裁権力の発動・外部情報  
 の欠如・物的生産力よりも偶発的僥倖をあてにする精神主義・「大本営発表」  
 が大日本帝国の専売特許ではなかった、という些細な点も含めて一、そのよう  
 な意識は、おそらくここで言われる「アクチュアリティ」の根拠を構成してい  
 るはずであり、この自発的な同一視の強さと、おそらくは比例して、「近代の  
 超克」が昂揚させることをめざした民族的心情が一般的にも、蘇ってきた、も  
 しくは出現してきた、ように私には見うけられるのだ一言うまでもないが、こ  
 の同一視が可能のためには、「西洋国・連合」も「非・西洋」国も戦前と（殆  
 ど）変わっていない、という認識が前提に在ることになる一。

私が眼にすることが出来たのは、富山房百科文庫版の『近代の超克』と廣松  
 氏の上記著作だけであるが、1942年10月号の『文学界』に掲載された座談会そ  
 の他で展開された「近代の超克」に関して、文化的小よび民族的という二視点  
 の混合を見るためには、少なくとも私にとっては、この二冊で充分であった。

「現在我々の戦ひつつある戦争は、対外的には英米勢力の覆滅（!）である  
 が、内的にいへば近代文明のもたらした（…）精神の疾病の根本治療（!）で  
 ある。これは聖戦（!）の両面であつて、いずれに怠慢であつても戦争は不具  
 となるであらう。」（亀井勝一郎。（!）は引用者の挿入。以下も同様）という  
 記述などはまさに典型であるが、たとえば「近代的精神の超克は、先づ我々自  
 らにおける近代的自我からの解放を意味せねばならない」といった吉満義彦の  
 「文化的」視点に拠った指摘に於いても、それが同時に「根源的自然性への、  
 生命地盤への復帰、古典人的自然徳性乃至精神性の営み(?)へのより深き開眼  
 の形而上学的意味(?)をしらしめる」というような目的（『近代超克の神学  
 的根拠』。(?)は引用者の挿入。以下も同様）に拘束されている限りに於いて、  
 結局は林房雄が『勤皇の心』で言う方向、即ち、「西洋に教えられた主義と流  
 派」による「神の否定、人間獣化、合理主義、主我主義、個人主義の行きつく  
 道は、当然、“神国日本”の否定」という「過誤・大罪惡」になるから、「国の  
 伝統の清冽なる流れのただ中に禊」し「神と天皇の前にひざまづ」くべきであ  
 る、といった「民族的」方向に向かわざるを得ないように提起されている、と

私には思われる。

「西欧・退落する近代」対「日本・近代の克服主体」という図式は、「新文化の創造といふことのためには近代精神の超克も必須ではあらうが、アメリカニズムといふか、その物質文明力といふか、これの超克についても等閑も附し得ないと思ふのであります（…）新欧州文化圏と新東亜文化圏の建設の間に若し共通なものがあり、聯関があるとすれば、その重大な一つのもはこのアメリカニズムを如何に克服するかといふ課題に在ると思ふのであります」（津村秀夫）というような、それこそチャップリンの『モダン・タイムス』的視点からの「批判」も含まれてはいる。しかし、全般的な基調は、やはり文化的視点を民族的視点到包摂するところにあり、したがって「西欧・退落する近代」と「日本・近代の克服主体」という図式の運用も、実際にはかなり恣意的に行われた、と言わざるを得ないようである。廣松氏により引用されている京都学派の論説に於いても、同様の趣旨に基づく「世界・西洋・東洋」の対比が取りあげられている。たとえば「東洋の原理（？）は正に無であるのである。西洋的実在は、自然にせよ神にせよ人間にせよ（？）、要するに有の原理である。（…）今、世界は、単なる西洋ではなくして、同時に東洋であらうとする（？）。それは世界が真に具体的に世界として現はれるべき段階に達した印である。かくて東洋は、今まで淀んでゐた堤をきつたように、世界史の潮流となりつつある。そして日本はかかる世界史的秩序（！）の主要契機であるべき課題を負せられてゐるのである。」（高坂正顕）あるいは「支那政府は、支那植民地化の法的表現たる九カ国条約を楯に、事々に欧米を動かして我が国に対抗するに至つた。かくて遂に支那事変は勃発した。東亜の安定を念願する我が国は不拡大方針を採ったが、支那政府の容れるところとならず、事変は遂に全面的に拡大するに至つた。支那事変も東亜に於ける日支の紛争であると同時に、その本質上日本の英米に対する闘争（！）であり、従つて一つの世界戦（！）である。」（高山岩男）というような、言うならば「日本的世界性」—それは同時に、彼らの西洋理解、彼らの「西洋性」とでも言うべきものへの果てもない疑念をもたらす—の主張がそれである。西洋的教養を有していたこれらの学者たちの抱

くにいたる民族論、「今、世界は、単なる西洋ではなくして、同時に東洋であらうとする」というような現状認識も、実際は、西欧文脈の内部から提出された「西欧の没落」を文字通りに受け容れ、その延長で、西洋に対峙する東洋もしくは日本<sup>1)</sup>の価値を持ち上げたにすぎない、ようであるが、その根底にはやはり、同じく廣松氏の引用による西田幾太郎の1933年の記述、即ち、「現在の日本は世界の日本として世界に示すべきものを有たねばならない、(…)我々民族は我々民族の心の底(!)から生み出された世界的思想(!)を建設せなければならぬ。(…)世界的思潮に対して自己自身の立場から世界的思想を扱ふことができ、而して後我々は世界的日本(!)として外、世界を服せしめ、内、人心を統一することができる(?)のである」というような、そしてまた、同じく西田幾太郎の、三木清との1935年の対談に於ける、「西洋哲学を突き抜けてゆかなくちゃあならない」などの言葉があり、それらに基礎を置きそれらに促されての発言、ということになっているのであろう。そして、その一見明快な処方箋とでも言うべきものが、鈴木成高による「近代の超克といふことは、政治においてはデモクラシーの超克であり、経済においては資本主義の超克であり、思想においては自由主義の超克を意味する」という、かの有名な記述ということになる。

既にもう十分に「世界化」を果たしてしまったかのような、あるいは「近代ヨーロッパ化」にともなうさまざまな欠陥を知悉し、克服し終えたかのような、これらの記述の威勢のよさは、いったい何処から来たのであろうか。対西洋・劣等感などは少しも認められないかのような意気衝天ぶりは、しかし同時に、いささかの悲壯感も漂よわせていて、結局のところは、お祭りの「掛け声」みたいなもの、と言いきってよいのかもしれない。実際、文化的視点からの対比はそれなりになされ、分類の機能は発揮されているが、さてそれでは具体的にはどうすれば良いのか、という段になると、検討すべき方法・手順などは少しも示されていないのだ。言い換え得るなら、否定的対象である弁別的理性を自ら用いておりながらも、解決のための総合的理性はどこにも援用されていないのであり、つまりは、否定の対象である近代的思考それじたいの段階、という



ことになる。にもかかわらず、文化的視点から民族的視点へと拠って立つ基盤を変えることによって、あるいは、戦争詩を書きつつ—こんなところで、はかrazも、我々がN氏を思い出すことになるわけだが—フランス・ジャム論も書くという三好達治のように、二つの視点を併用することによって、とどのつまりはここでも林房雄が示した方向、すなわち「何千年来(?) 皇室を中心として生々発展し来つた我国文化の迹を顧みるに、それは全体的一と個体的多との矛盾的自己同一(?) として、作られたものから作るものへと何処までも作る(?) と言ふにあつたのではなからうか。全体的一として歴史において主体的なものは色々変わった。(…) しかし皇室はこれらの主体的なるものを超越して、全体的一と個別的多との矛盾的自己同一(?) として自己自身を限定する世界の位置(?) にあつたと思ふ」(西田幾太郎) というような不明瞭・不可解きわまる特殊性の主張、それを延長すればまさに『昭和二十一年年頭の詔書』に於いて指摘させられている「日本國民ヲ以テ他ノ民族ニ優越セル民族ニシテ、延テ世界ヲ支配スベキ運命ヲ有ストノ架空ナル觀念」の形成・流布に奉仕するに到る、そのような主張へと移行、あるいは還帰してしまうのであり、実際、そのような「知性」の変容ぶりを見てしまうと、日本文化はそういうものなのだ、といった類の言辞に出会う時も含めて、私などは、ただ、茫然とするほかはないのである。

\*

もとより、その種の個人的感慨を吐露したところで、共同体に生起したさまざまな事態の再検討には少しも役立たないことは言うまでもない。既に知られたことがらの単なる繰り返しにすぎないが、敢えて私とその「再現」を試みるとすれば、大略、以下のようなようになるようである。

好むと好まざるとに関わらず、近代日本を形成してきたのは「近代主義者」たちであった。個別的には彼らの伝統指向も指摘できようが、層として捉えるならば、彼ら近代主義者が、西洋の経済・政治・法・社会・文化制度を移入し、自然・人文・社会科学を取り入れ、殖産興業につとめたのであり、実利的知識に関しては西歐的(プロシア的?) 価値に少しの疑念も持たなかった。

たしかに、或る領域では伝統的価値が尊重されたかにみえる。「天皇・カイザー」制の確立のための諸部門や「文化的」価値を商業化し得る諸部門、そして私的・趣味的な諸部門。だが、一例として挙げるだけだが、たとえば西行や『徒然草』の作者、あるいは万葉の昔や教養としての李白・陶淵明などに見出されるような自然観が、近代化の遂行過程で公的に支持され・保持されていたとは、私には思われない。いわゆる日本的な美・感性などさえ、公的には、消却しても構わないものと見なされていたように思われる。植民地に於ける「御国風」の強制根拠も、伝統にもとづくというよりは、「既に近代化された」日本という「自信」に裏付けられた観念、であるように思われる。皇民化は、教育の領域に導入された復古思想の具体化であるとしても、西洋に追いつくという意味での「近代化の成功」に裏打ちされていなければ、古代からの先進国である中国、江戸時代に於いてさえ先進国であった朝鮮などに対して、強制する意図など生まれようもなかったであろう。

しかしまさにその復古の領域で、すなわち上からの統制の便宜として「武士の道徳・制度」の再現をめざす、という程度にしか思考の近代化が成されていなかった点に於いて、近代主義者たちは近代化に「失敗」したと捉えるべきである。「天皇・カイザー」制の確立のために意図的に武士の道徳・制度を保持した、という見方もあり得るであろうが、結局のところ、それを「強制」されたとする国民も含めて、近代主義者たちがそれほどに巧妙な術策を弄したとは、私には思いにくい。西洋に対する劣等意識をその証左として挙げる事が出来る。西洋的近代化に「失敗」したからこそ、西洋への劣等意識は存続し、であるからこそ、「民族的」特性に依存して、西洋文脈を踏襲するだけの近代化を文明の悪弊とする批判が生まれ、その批判を鵜呑みにして、復古としての「兵農一致」の理想を求めた農本主義者が現出し、庶民の次元での「民族的・反西洋」意識の一般性を獲得してしまった、のである。

もちろん、この近代化の「失敗」には、精神・道徳的な領域に関わる近代化は、経済・社会制度での確立よりも長い時間を必要とする<sup>2)</sup>という当然の「弁明」が可能であり、「失敗」が全否定を意味することにはならない。しかし、

当時の見方は、そうではなかった。日本浪漫派は、日本の近代に「文明開化の論理の終焉」を見る。保田與重郎によれば「マルクス主義文芸が、明治以降の文明開化史の最後段階であった」ということになるが、そうであるなら、これまでの歴史を揚棄するというマルクス史観が—あたかも今日そうであるかのように(?)—既に現実的に「終焉」したのであるなら、開化を拒否して遡行し得る対象は、依然として『夜明け前』の、尊皇攘夷・復古思想しかない、ということになる。

近代化の「失敗」を知った「近代の超克」は近代を否定的に継続し得たかもしれない。しかし「失敗」を意識せず、むしろ「終焉」を前提としてしまった「近代の超克」は、近代に対する切断の意識しか持たなかったようである。両者の違いは、その後の事態に対してもさまざまに異なった対応をもたらしたと思われるが、文化的視点が民族的視点に場所をゆずり、欧米植民地主義の後を追う意味での、「世界最終戦」での勝利を要求する一般的風潮の中では、「民族的」な「近代の超克」観念が「近代化の失敗」の観念を全く隠蔽してしまったようである。たとえば「世界は欧米中心に組織されている。中国はその水準を高むるために欧米依存であるべきである。その結果はアジアはアジアのみを以って先ず団結し立ち上がらなければならない。日支事変も、結局その目的のために遂行されなければならない」という一庶民の曲折ある論理（吉見義明『草の根のファシズム』所収）が描いているように、「反西洋として・欧米に対抗しつつ・欧米植民地主義の後を追うため・中国を指導する」大日本帝国は、近代化の輝かしい「成功者」だったのであり、まさにそのような日本を範型とするという点に於いて、典型的な戦前期「アジア主義」が形成され得た、と言えるようである。

「近代の終焉」が虚構であると判明させられた戦後になって、近代化の「失敗」に対する反省がようやく一般化するに到った。実際に、その反省は、その後の動向を左右するほどに深く強かったのであって、総司令部の意向というだけでは、その後の「アメリカ化」や「非・日本化」を説明しきれないように私には思われる。そして「近代の超克」観念はいつともなく雲散霧消してしまっ

たが、しかし、その観念への反省それじたいは、在ったのか無かったのか、はたして何れだったのであろうか。

日本の主流は現在でも「近代主義者」に在るが、しかしその「近代化」の領域はまだまだ限定されており、必ずしもその達成が充分でないという課題は依然として残存しているようである。国際的な動向に関して言うなら、「近代化の失敗」への反省が少しでも失われると、再び「世界史的立場」に依拠して、民族として「世界(史)への貢献」を果たそう、という虚構が流されることは大いに考えられるのであり、その時になって「近代の超克」観念が再び登場してくるといふ懸念は、これはまったく無しとはしない、ようにも思われる。

3

「半工半読」に示された「アナーキズム」というものも、考えてみれば「日ひ出いで作はたらく 日入ひち息おる 井鑿いり飲ねむ 田耕いし食どう 帝はの力たが我がに何く有みらんかど (竹内実・萩野脩二訳) というような古謡の、それこそ「近代化」版と言えるのかもしれない。「アナーキズム＝テロリズム」という等式が立てられてしまった現在、一般的にもこの「アナーキズム」という言葉の運用は難しくなっているが、やはり私には「無秩序・無規制」の代名詞としてそれを用いることには、依然として、躊躇の思いが強い。本来はもっと積極的な価値を有している語彙ではないのか。もっと身近な、無用な権威に拘束されぬ、個が個で在り得てお互いを尊重し得る、そのような、ある種の「ユウトピア」思想ではないのか<sup>3)</sup>...

郷愁として在る古き時代への遡行が我々のところをやるせなく撃ちつづけるのは、これは懐かしくもやむを得ない宿命であろうけれど、しかし、敢えて例えてみれば我が中国語と同じで、単に夢想の的であるのみでは積極的・効果的な結実は望めるはずもない。

文化大革命後の中国に、言うならば「近代の超克」を仮託するかの如き、先に見た「三つの回答」を要求する視点も、やはりこの種の、しかし未来へ向けての夢想・郷愁から発したもの、と言えないだろうか。ここでの夢想・郷愁も

全く否定的な意味合いばかりではないつもりであるが、しかしどんな観念でもその運用次第で「危険思想」に陥ちこむのは、それこそ「近代の超克」や「アナキズム」などの語彙が示しているとおりでである。たとえば「ヨーロッパの市民的権利が、個人の権利としての私有（財産）権を基調として構築されているのに対し、中国の政治権利上の自由・平等は、国民・人民、あるいは民族といった集団の全体的な生存の権利を基調としている」（吉沢 南『個と共同性—アジアの社会主義—』）という把握も、「近代中国」に対してはおそらく正当なのであろうが、現時点で、もし中国の民衆が「ヨーロッパの市民的権利」を求める方向が、万が一にも在り得たとするなら、ここでの「集団の全体的な生存の権利」は、ことによると、権力で上から抑えるための、つまりは「アナキズム」を全面的に否定するだけの、はなはだ危険な観念に、なりかねない、ようである。

従って、と言い切ってよいのかどうか、先に述べた「三つの回答」を要求する視点も、結局は、その実現のための場をわざわざ中国に措定することなく、我々が、自ら引き受ける形で、自分の関心の中で、その回答を求めつつける、ことを要請している、と見直すべきなのであろう(か)。

最後に挿話をひとつ。中国語のクラスの二人目の先生、例の「深窓的令嬢」が留学期間を終えて帰国するに際してお別れの会が開かれ、もう中国語から遠ざかっていた私もリュクサンブール公園近くの中華料理店へと招かれたのだが、その席には、何時どのようにやって来たのか、彼女の家族・親戚一同がパリまでどっと繰り出していて、その数の多さだけでもすこぶる壮観であった。その中で私の注意を引いたのが、紺のベレー帽をかぶり、黒ジャンパーに焦げ茶のよれよれのコール天のズボン姿の男。「古代農夫」と重ね合わせるのはさすがに無理だが、ごま塩頭を隠し黒眼鏡をかければ、形容の不適當さは承知の上だが、それこそ一昔前の「アナキスト」風の老人である。言葉を交わしているうちに一彼のフランス語は、言うまでもなく、私の中国語より格段と上ではあったが一彼は私の一家がパリにずっと住んでいると思ったらしく、祖父のことが話題になり、私は正直に、アメリカはシアトルの郊外に住む「移民」である、

と告げると、老人は破顔一笑、「私もそうです」と答えてきた。その後の色々な言葉から判断すると、私にはそういう生き方のほうが羨ましく思えるのだが、彼は一度も「故郷へ帰りたい」と思うことのない生活をしてきたようである。と言っても、もちろん、栄耀栄華に満ち溢れた生活をここで送っているというわけではない。そういえば、年令的には少し若そうだが、例の「半工半読」の「一味」だったのではなからうか、などと私はさっそく期待して、それとなく彼の過去へと話を向けてみたのだが、この食えない老人曰く、「我々の仲間にも嫌な奴らが多くてね。今で言う労働運動の活動家だけど。中国人全体が悪く言われて、ずいぶんと迷惑したものだよ…」

夢想は現実から裏切られる、という事実の一例を、やはりここにも、見るべきなのであろうか。

好不容易我能写完了！

#### 注

- 1) 「東洋は支那人の考えでは海洋より支那に通交する外国で、支那より東方にある国である。清朝時代では東洋はほとんど我が国だけに限らるることとなった。東洋銅といえば日本銅の意味である。」(矢野仁一『アロー戦争と圓明園』)
- 2) 「私は、非西洋諸国の近代化を単なる西洋化としてとらえる見解を排して、これを西洋からの文化伝播に始まる自国の伝統文化のつくりかえの過程としてとらえる視点を提出した。」(…)「広義における近代化の三領域のうち、伝播可能性の度合いが最も高いのは、経済的近代化すなわち産業化の領域」であって、「政治的近代化すなわち民主化の領域」の「伝播可能性の度合いは経済の領域におけるよりも劣る、と考えられ」、「社会的・文化的近代化の領域においては、伝播可能性の度合いはもっといっそう低いであろう。」(富永健一『日本の近代化と社会変動』)
- 3) 「ユウトピア」性に関しては異論が在り得ようが、思想そのものについては一どんな著者の引用でも構わないのだが—たとえば以下のような規定：《Anarchie, pour les imbéciles, signifie: désorganisation, gâchis, désordre; (...) Nous (...) savons qu'anarchie signifie: abolition de l'autorité, de l'exploitation, affranchissement complet de l'individu, (...).》(Jean Grave, *L'Anarchie, son but-ses moyens.*) 私としては「アナーキズム」に対する訳語を、たとえば「反権威・個我尊重主義」とでもしたいくらいである。